

NihonkaiShinbun presents

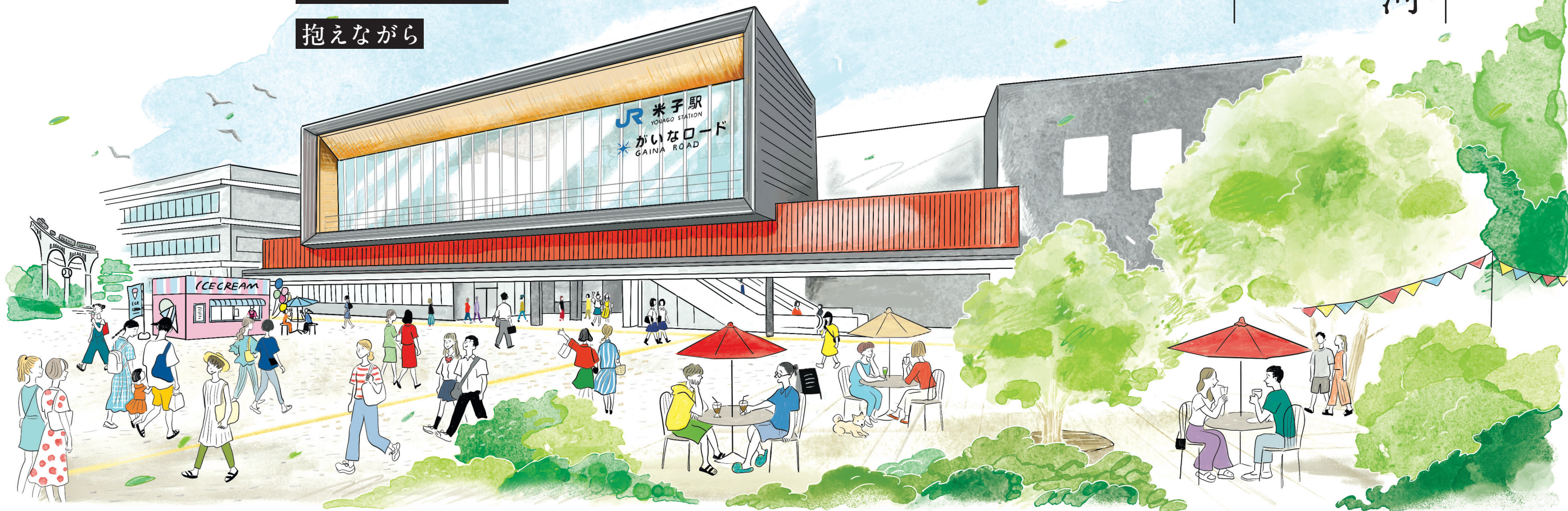
2033 YONAGO STORY *future*

新しい米子駅から生まれる、「未来」の物語

Yonago Story
10 years later

#01 「がいなロード」で
再会した二人
小さなつまづきを
抱えながら

偶然再会したミチルと大河
小さな街の片隅で
小さな物語を紡ぎ始める。



文=松本 薫
イラスト=伊吹春香

※この物語はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

がいなロード

7月のその日、田所大河はキャリアケースを転がしながら、米子駅の南北を結ぶ空中通路「がいなロード」を北口に向かって歩いていた。「がいな」とは米子弁で「大きな」を意味する言葉だ。

側面のガラスを通して夕焼けが差し込む。オレンジゼリーみたいな色だ。透明なゼリーの中を人々が行き交っている。停車中の普通列車が眼下に見え、さっき降りた特急やくもが西へ向かって滑り出ていった。

ロードの中央に、「祝 新米子駅開業10周年」の横断幕が掲げられている。

大河が高校を卒業して米子を離れるときは、まだ以前の駅が残っていた。成人式のときは工事中だった。新駅が完成してから何度か帰ってきたけれど、そのたびに見知らぬ駅に降り立ったような気がした。

今は——12年間過ごした神戸を引き上げてきた今はどうか？

やっぱりまだ知らない駅のような気がする。生まれ育った街の駅なのに、どこかよそよそしい。いっぱいしの料理人になるという目標に挫折して、何のあてもなく戻ってきたせいかもしれないが。

横断幕の下を通ったとき、どこかで見たことのある女性とすれ違った。

どこで会った人だっけ。そう思った瞬間、「T.T.」と言われてびびりた。田所大河だからT.T.。中学時代のニックネームだ。

「あ、いや田所くんだよ。矢野です」

そうだ、中学で一緒だった矢野ミチルだ。あの頃はちょっとふつくらしてカビバラっぱい子だったけど、ほっそりした今は、なんだろう、シマリスみたいな感じ？

「お久しぶりです。中学以来だから、ちょっとわかんなかった」



「成人式でも会ったじゃない。まあ10年前だけど。あ、そうだと、成人式の後の同窓会で10000円貸したの覚えてる？」

「え、おれ10000円借りたっけ？」

「うん、帰りがけに10000円貸してくれ、こんど会ったら必ず返すからって。すごい真剣な顔だった。T.T.は覚えてないの？」

覚えてない。たしかに成人式の後、駅前の居酒屋で中学の同窓会があった。酒が解禁になってはしゃいでいる奴が多かったし、大河もビールやチューハイを飲んだはずだ。酔っぱらっていたのだろうか。

我ながら情けない。あの頃、Tを二つ並べた顔文字は△泣き顔や△情けなさ」を表すアイコンだった。昔から優柔不断で要領が悪い。ホテルの厨房で10年働きながら、調理補助から上へ行けなかったのは、たぶんそんな性格のせいもある。

「すみません。今返すよ」大河が財布を取り出そうとすると、「もし時間あったら、北口でラーメンでも食べない？」とミチルは言った。「ちようどお腹すいてるし、お金で返されるより、ラーメンご馳走してもらほうがいいし」

駅舎の正面はガラス張りになっていて、2階のフロアから駅前を見通すことができる。以前より緑が増えたような気がした。駅前通りの銀杏並木。北口広場のケヤキ。脇の通りに植えられているのはハナミズキだろうか。駅前通りには赤や茶色のパランパが並び、人々がその下で飲食を楽しんでいる。夏の夕方に、外で飲むビールは最高だろう。



「T.T.はどこかへ行くの？ キャリー引いて、旅人みたいだね」

「昔のあだ名はキャンベシってほしいな」

「あ、わかった。ごめんね」

「さっきの質問だけど、その逆。神戸から戻ってきたんだ。今日からまた米子の住人」

「おー、それはまた奇遇。では、勇者の帰還を牛骨ラーメンで祝いましょう」

大河も北口広場に隣接する「牛骨ラーメン横丁」に入る。勇者って美味かよ、まあいいけど……。

6、7軒が並ぶ横丁は、木の引き戸があったり、赤い提灯が下がったりして、なかなかレトロな雰囲気だ。

「牛骨ラーメンって全国的に人気だけど、もともとは鳥取県の中西部が発祥なんだって。知ってた？」

冷たい水で喉を潤しながら、大河は「うん。これでも料理人——を指して、くじけた男だから」と答える。

「そうなんだ。人生いろいろあるよね」

カウンターに出された牛骨ラーメンは、醤油味だった。スープに独特の甘みとコクがあり、それが醤油の風味とよく合う。地元の小麦を使っているという麺も、つやつやしたチャーシューも、新鮮なネギも、何もかもがおいしかった。

ミチルは、とりだい病院の看護師をしていること、1年前に離婚して3歳の娘を育てていること、普段は保育園に預けているが、今日は母親がみてくれていることなどを話した。

ラーメンをすすりながら同級生の身の上話を聞くのは、なんだか妙な気分だ。30年生きてきただけでも、人生いろいろある。

店を出ると、駅前広場に置かれた鉄道のオブジェがライトアップされていた。銀河鉄道をイメージさせるオブジェが、大河は子どもの頃から好きだった。

「ねえ、10年前の10000円、何に使ったの？」

「いや、覚えてない」

「でも真剣な顔してたよ。貸してくれなきゃ死ぬ、みたいな。田所くんのあんな顔見たことなかったから、ソッコーで10000円出したもん」

大河自身が知りたいくらいだ。優柔不断で、何かと人任せな自分が、なぜそんなに真剣な顔で頼んだのか。なぜ10000円が必要だったのか。

駅前通りを実家に向かって歩く。父も母も、一人息子の帰りをしばらくは歓迎してくれるだろう。たぶん祖父も——。

振り返ると、米子駅が夏の宵に白く浮かび上がっていた。



2033 YONAGO STORY

新しい米子駅から生まれる、「未来」の物語

ともに30歳、
同級生の大河とミチルが、ある日の夏の夕方、「がいなロード」で偶然再会する。
それぞれが小さなつまずきを抱えながら、どんな明日に向かっていくのか・・・
これからの米子を舞台にした物語。
生まれ変わった米子駅は、街はどんなふうに 変えていくのでしょうか。
近い未来の米子を、ともに思い描いてみませんか。

物語の終わりは2人の門出。
そしてこれからも、米子駅は小さな物語を紡ぎ続ける。

#06

クリスマス盛り上げてくれるアーティストたち
でもミチルのイブは・・・



#07

生まれ変わった米子港ウォーターフロント
ミチルの悩みを聞いた大河は



#02

変わる景色と変わらない景色
城山から見たものは

#03

パワーがはじける米子がいな祭
その夜の小さな事件

疾走する自転車が起こす小さな風

新しい街米子サウス

#04

#05

海に湯が湧くリゾートスパ皆生
大河に声をかけたその人は



and more...



米子市在住の作家・松本薫、鳥取市在住のイラストレーター・伊吹春香が
織りなす10年後の米子を舞台にしたヒューマンドラマ連載小説

「2033YONAGO STORY」この小説は2023年7月25日に日本海新聞に掲載されたものです。

【全10話】日本海新聞ホームページにて無料公開中

日本海新聞 NetNihonkai <https://www.nnn.co.jp>



鳥取県を舞台にした
オリジナルストーリー。

地元発

日本海新聞だけのオリジナルコンテンツ

生活を応援
暮らしに
やさしい
購読料

月額[税込]

1日当たり約87円

古紙回収サービス(無料)

アプリで過去1週間分も読める

2,600円

鳥取や但馬の豊富な地域情報

●地域の出来事、話題●おくやみ●事件・事故●県
や各市町村の動き●県内スポーツ・記録●コラムなど

お電話で



鳥取県東部地区→ ☎0120-23-4141
鳥取県中部地区→ ☎0120-26-8330
鳥取県西部地区→ ☎0120-33-1405
兵庫県但馬地区→ ☎0120-82-4541

インターネット
から



日本海新聞 購読

検索

ケータイ・スマートフォン
からは→



■お問い合わせ■

(株)新日本海新聞社 読者販売局 ☎0857-21-2886
〒680-8688 鳥取市富安2丁目137番地 受付 AM9:30~PM6:00 ※土日祝除く

無料 7日間のお試し読み。じっくり読める紙の新聞も、どこでも読める電子版も・・・